

## 中国における都市住宅の平面構成に関する研究

## その1 庁 (Ting) の概念と役割について

○正会員 林 方亮\*<sup>3</sup>同 友清 貴和\*<sup>2</sup> 同 松井 宏方\*<sup>1</sup>

## 1. はじめに

人口の都市集中化が急激であれば住宅の供給が追いつかず住民は狭小過密の住生活を強いられる。しかし所得水準が向上し、住宅難が緩和されるに従い住戸面積が拡大してゆく経緯は世界の各都市が経験してきた通りである。中国でも解放後人口の都市集中化が進み狭小過密の生活が営まれているのは事実であるが、1950年代からかなりの量の集合住宅が供給されてきた。当初は供給主体である地域の経済事情と設計を担当する建築設計院の判断とで面積水準に大きな地域差が見られたが、1970年代後半から国家の面積ノルマ指標が示され各地に浸透して行った。1987年の国家の住宅建築設計規範によると、標準家族 3.5人で住戸専用面積<sup>(注1)</sup> 36m<sup>2</sup>~39.6m<sup>2</sup>が目標水準とされている(図-1)。

ところで初期に供給された住宅は23m<sup>2</sup>前後の日本と言う2kタイプが主流で、時代を経るに従い2LDK、3DKに近いタイプが出現し始めた(図-2)。この傾向からすると、中国の住様式は日本の住様式と異なるとは言え、住戸計画発展の歴史は戦後日本の住戸計画の発展に類似していると推定される。即ち、住戸面積が増大するに従い、私室と公室の分化が進行してゆくという過程である。

本研究は、中国の都市住宅の平面構成が過去40年近くどの様な発展形態をたどり、どの様方向に進むかを推定し、今後の中国住宅計画における知見を得ようとするものである。

## 2. 研究の方法

日本の都市住宅計画理論の発展はDKからLの出現とこれ等の定着を軸として分析することができるが、中国の場合は必ずしもこの様な流れではない。例えば、日本では食寝分離論に基づき、DKの出現が早かったのに対し現代の中国では食堂(餐室)の定着は未だ確実ではなく、寝室(臥室)にテーブル、イスを持ち込み居間兼食事室に利用する場合も多い。しかし臥室以外

の公室要求は強いと考えられ、D又はLに近い機能を持つと推定される空間がかなり初期から見受けられる。

第一報である本報告では、これらの空間が次第に「<sup>(Ting)</sup>庁」という公室として定着するという仮説を立て、かつ今後「庁」が中国の都市住宅計画理論の発展を考察するための鍵となることを立証しようとするものである。当面の研究では建築設計院で集めたプラン、各種中国の文献を整理するという方法を採用した。

## 3. 都市住宅における庁の萌芽と概念

「庁」という言葉は長い間中国古代住宅建築の中でも使用され、相当の歴史を持つ。<sup>(注2)</sup>しかし解放後の現代中国の都市住宅のプランを見ると、1970年代までは居室、起居室、餐室、臥室の室名しか見当らず、庁を用いた部屋は無かったと考えられる。<sup>(注3)</sup>1979年に初めて小庁と名付けられた空間が現れてきた。1980年になると、庁の付いた建築用語は先ず過庁、起居庁として出現し、さらに門庁、客厅、南庁、北庁、内庁、中庁、明庁、暗庁、敞庁、小方庁、小前庁、大方庁、大庁、方庁、庁が次々登場した。

都市の集合住宅において小庁は居室ではなく、面積が居室より小さいものである。小庁は住戸の入口に位置し、ここを通して各部屋までに到る。これが交通配分の働きをなす。しかもここでは食事、接客、子供の娯楽等の機能を備え、一つのシングルベッドを置くことすれば、子供の成長による就寝分離、老人の同居から生じた住行為のはみ出しを受け入れることができる。<sup>(注4)</sup>(図-3)。小庁の後出現した過庁は、一般的には通路の意味しか持っていないが、集合住宅での過庁は食事接客、就寝この三つの居住行為を行う空間である。<sup>(注5)</sup>(図-4)。起居庁は小庁、過庁と異なり、居室とほぼ同じ面積である。ここでは家族の団らん、接客という様な起居行為が重点に置かれ、食事は副次的な行為とされる。起居庁兼餐厅、或いは起居兼餐室という言い方が多くと見られる。<sup>(注6)</sup>(図-5)。

同じ1980年頃に出現した門庁は、初めは玄関の役割

であったが<sup>注7)</sup>、1985年になると、食事をし、冷蔵庫、食器棚等を置き、必要な時にベッドを入れることも可能になっている(図-6)。<sup>注8)</sup> 餐厅と客厅の初出現の頃は食事と接客という単一の機能のみが付与されたが、1984年頃に、餐厅は小厅の機能に相当し、客厅は起居、食事で使われる起居厅の意味と同じようになった。

その他小方厅、小前厅は小厅と同じで、大方厅、大厅は起居厅と類似し、方厅は小厅、起居厅両方の意味と示すことになる。<sup>注9)</sup> 南、北、中、内厅は単に厅の所在位置の相違により名付けられたものである。また自然採光できるのは明厅と呼ばれ、そうではないのが暗厅に属する(図-7)。敞厅とは外壁を折り畳み戸で作り、必要であれば完全にオープンできる空間である。<sup>注10)</sup>

収集したプランの中では厅だけの名前が付いた空間も多く見られる。この空間は小厅や起居厅の概念と近似することがある。<sup>注11)</sup> 即ち厅のみで用いられる用語はそれらの二つの概念を持ち、××厅に比べてもっとあいまいな表現である。中国の集合住宅で住戸のタイプを示す時、1980年以前には一室戸、二室戸、三室戸という風に称し、「厅」の出現に従って一厅一室、一厅二室、一厅三室又は一室一厅、二室一厅と称する様になった。<sup>注12)</sup> 厅の付いた呼び方を日本の2DK、3DK、2LDK、3LDKと比較してみると、厅は食事室(D)、居間(L)の働きを兼ね、多種の機能を備えるものである。そして室から厅までの変化とDからLまでの流れは非常に近似し、公私室の分化要求より生じる機能の変化を示していると考えられる。

#### 4. 中国建築における厅の概念

日本の漢和辞典の中では「厅」という概念が大きな室、広間、ホール、<sup>注14)</sup> 或いは部屋、客間、表座敷と言ったさまざまな意味を表す。<sup>注15)</sup> 中国語における「厅」とは新華字典によると、集い又はお客様を招く時使う大きい部屋であり、そのほかに、政府部門の事務機関をも表し、特に省級機関の分掌単位を表す。<sup>注16)</sup> 中国建築には厅で構成した用語を表-1のように分類できる。

「厅」の漢字の中にある「广」は中国語においたは壁のない大きな部屋で、多勢の人の集まる所を意味し「丁」は人の意味に当たる。従って、「厅」という概念のイメージとしては一定の広さがあり、割合に開放され、多人数で使用できる様な公的な生活行為が行われる空間であると認識されている。

\* 1 鹿児島大学教授 \* 2 同大学助教授 工博  
\* 3 同大学大学院生

表-1 「厅」の付く建築用語

分類方法	名称	解説	分類方法	名称	解説
	門厅	玄関ホール		南厅	南側にある広間
	過厅	通り抜けの広間		北厅	北側にある広間
	起居厅	リビングルーム		中厅	真中にある広間
	餐厅	食堂、レストラン		前厅	裏にある広間
	飯厅	食堂		後厅	裏にある広間
	客厅	客間、応接間		明厅	自然採光できる広間
	廳厅	かごの間		暗厅	自然採光できない広間
	花厅	庭園内の応接間		内厅	内側にある広間
	舞厅	ダンスホール		正厅	主要な広間
	会議厅	会議室		側厅	脇にある広間
	展覽厅	展示ホール		方厅	方形の広間
	排練厅	リハーサルホール		圓厅	円形の広間
	候機厅	飛行機待合ホール		敞厅	戸や敷居のない広間
	展車厅	駅の待合ホール		大厅	大きな広間
	咖啡厅	喫茶ホール		小厅	小さい広間
	休息厅	ロビー		广厅	広い室

#### 5. まとめ

中国の都市住宅では「厅」という概念が集合住宅に持ち込まれた頃より、住まい方の変化が起った。「厅」の出現は、住戸内に一般の居室から一つの多様な機能を持つ柔軟な公的な空間を分離することになる。それによって、公私室の分化は可能になってきた。「厅」という空間は中国の集合住宅でかなり重要な役割を果たすことがわかる。

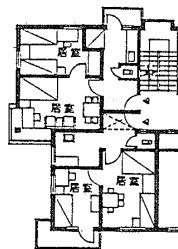


図-2

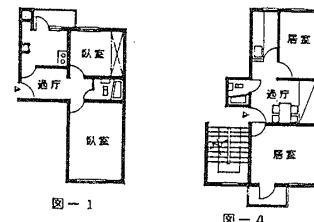


図-4

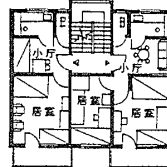


図-3

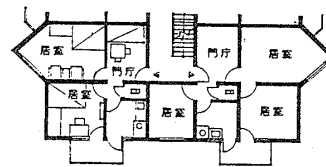


図-6

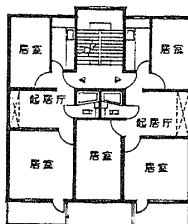


図-5

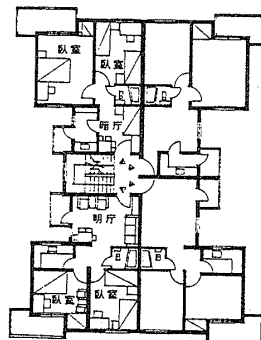


図-7

#### 注釈

- 1) 『住宅建築設計概説』 梁文説明1987-北京P.2参照  
その中にある住戸の建築面積を住戸専用面積に換えた
- 2) 『中国古代建築史』 劉敦楫 主編 中国1980年10月
- 3) 『中国の住宅』 劉敦楫 著 田中誠 訳 筑谷昭次 訳  
鹿島出版社昭和51年7月30日 この二つ文獻参照
- 4) 『建築設計資料集』 1. 中国北京P.388~389参照
- 5) 『建築住宅型系列選訳』 芦原豊 著 P.84~106  
参照 建築誌3. 中国建築工業出版社1980年5月
- 6) 『一厅二室型与居住厅』 魏定和 著  
P.42~45 参照 建築誌5. 1980年12月
- 7) 『城镇化与多样化住宅』 王尚俊等著P.15.16 参照  
建築学報1984.12. 中国建築工業出版社
- 8) 『大連市住宅型系列』 李彦一 著  
P.36 参照 建築誌5. 1980年12月
- 9) 『住宅建築設計概説』 梁文説明P.22. 1985年3月
- 10) 『住宅型及其室內設計探討』 葛曉 著 P.107.110 参照  
『探討住宅設計中厅行』 吳蘭生 著 P.36~38 参照  
建築誌6. 1981年4月. 建築誌1.2. 建築學刊1982.8.
- 11) 注5)の文獻 P.45 参照
- 12) 注3)の文獻 P.15 参照
- 13) 注3)の文獻 P.388 参照
- 14) 『一厅二室型住宅』 魏定和 著 P.69~76 参照  
建築誌1.1. 1982年8月 注6)の文獻 P.15 参照
- 15) 『中日大辭典』 愛知大学中日大辭典編纂部  
中日大辭典刊行会 1968年2月1日 P.1417 参照
- 16) 『漢語林』 羅田正 米山英太郎 著 大修館書店  
昭和52年4月1日 P.325 参照
- 17) 『新華字典』 商務印書館 1971年北京 P.428 参照